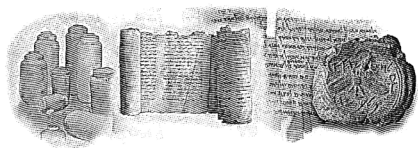


10課

6月6日

歴史としての聖書



安息日午後 5月30日

今週のテーマ

暗唱聖句

「わたしはあなたの神、主であって、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した者である……。」(出エジプト記 20:2 (申 5:6 も参照)、口語訳)

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である……。」(出エジプト記 20:2 (申 5:6 も参照)、新共同訳)

今週の聖句

サムエル記上 17 章、イザヤ 36:1~3、37:14~38、ダニエル 1 章、5 章、
マタイ 26:57~68、ヘブライ 11:1~40

聖書は歴史によって構成されています。聖書にある歴史は、神がすべてのものを創造された究極の始まりから、再臨において神が地球を回復される究極の目標に向かって、直線的に進んでいます。

聖書の歴史的性質は、聖書をほかの宗教の聖典と区別する一つの特徴です。聖書は、歴史の中で自ら行動される神の存在を当然のことと考え、その存在を証明しようとしません。初めに、神が言葉を発し、地球上の生命を創造なさいました(創 1:1~31)。神はカルデア人の中からアブラムを呼び出し、御自分の民をエジプトでの奴隷状態から解放し、御自分の指で石の板に十戒を記されました(出 31:18)。神は預言者を遣わし、士師を遣わし、御自分の聖なる律法と救済計画をほかの国民に伝えるための民を召されました。そして最後に、御自分の息子であるイエス・キリストをこの世に遣わし、歴史を永遠に分けられました。

私たちは今週、聖書に描かれている歴史上の重要ないくつかの問題と、聖書で述べられている歴史を立証するのに助けとなるいくつかの考古学的証拠にも目を向けます。

ダビデとソロモンの王制は、イスラエル史における黄金時代を象徴しています。しかし、ある人たちが主張してきたように、もしダビデとソロモンが存在しなかったらどうなるでしょうか。また、ある人たちが主張してきたように、もし彼らの王国が、聖書が記しているように広大なものでなかったとしたらどうなるでしょうか。ダビデがいなければ、国の首都であったエルサレムはなかったでしょう（サム下5:6～10）。ダビデがいなければ、彼の息子ソロモンによって建てられた神殿もなかったでしょう（王上8:17～20）。さらに、ダビデがいなければ、将来やって来られるメシアも存在しなかったでしょう。なぜなら、メシアが約束されていたのはダビデの家系を通してだったからです（エレ23:5、6、黙22:16）。〔もしダビデがいなければ〕イスラエル人の歴史は完全に書き換えられる必要があるでしょう。しかしその歴史が、聖書に書かれているように、イスラエルと教会に独自の役割と使命をまさに与えたものなのです。

問1 サムエル記上17章を読んでください。神はどのように決定的な勝利をイスラエルに与えられましたか。この勝利のために、だれが用いられましたか。この勝利はどこで得られましたか。

サムエル記上17:1～3に、戦線の地理的状況が詳しく記されていることに注目してください。キルベット・キヤファの遺跡は、この章の中に記されているイスラエルの陣地がまさにあった場所の丘の上にあります。最近の発掘によって、非常に要塞化された守備隊駐屯都市が、サウルやダビデの時代からそこにあり、谷を見下ろしていたことが明らかになりました。同時代の二つの門も発掘されました。古代イスラエルのほとんどの町には門が一つしかなかったので、二つの門を持つという特徴は、その場所がシャアライム（サム上17:52）であったと認定する助けになるかもしれません。シャアライムはヘブライ語で「二つの門」を意味するからです。

もしこれが本当であれば、私たちは聖書のこの古代都市を初めて特定したことになります。

1993年、テル・ダンという北部の町での発掘によって、ダマスコのハザエル王によって書かれた記念碑の碑文が見つかりました。彼は、「イスラエルの王」や「ダビデの家」の王に勝利したことを記録しています。これは、聖書におけるダビデ王朝の記され方と同じであり、聖書が言うようにダビデが歴史上実在したことの、さらに説得力のある考古学的証拠なのです。

問2 イザヤ 36 : 1~3、37 : 14~38 を読んでください。この記事は、ユダに対するアッシリアの大規模な軍事行動について伝えていますが、その中で神はどのように御自分の民を救われましたか。

紀元前 701 年、センナケリブはユダに対して軍事行動を起こしました。その記事が聖書に収められています。センナケリブ自身もそれをいくつかの方法で記録しました。首都ニネベで発見された彼の歴史年代記の中では、「私は、彼〔ヒゼキヤ〕の強固な 46 の城塞都市とその近辺にある無数の小さな村を包囲し、征服した」と自慢しています。彼はニネベの王宮で、ラキシユというユダの町に勝利したことを祝いましたが、その際に、王宮の中央の部屋の壁にラキシユへの包囲と戦闘を描いたレリーフを飾って祝ったのです。

ラキシユでの最近の発掘によって、センナケリブによって焼け落とされたあとの大量の残骸が見つかりました。しかし、エルサレムは奇跡的に難を逃れます。センナケリブは次のように自慢することしかできません。「ユダヤ人ヒゼキヤに関しては、かごの中の鳥のように、彼を彼の町に閉じ込めてやった」。エルサレムを破壊したという記述も、奴隷として捕虜を連れ去ったという記事もありません。

エルサレムが包囲されたことは事実ですが、聖書は、その包囲が 1 日しか続かなかったと記録しています。主の天使がエルサレムを救ったからです。イザヤが次のように予告していたとおりでした。「それゆえ／主はアッシリアの王についてこう言われる。彼がこの都に入城することはない。またそこに矢を射ることも／盾を持って向かって来ること／都に対して土塁を築くこともない。彼は来た道を引き返し／この都に入城することはない、と主は言われる。わたしはこの都を守り抜いて救う／わたし自らのために、わが僕ダビデのために」（イザ 37 : 33~35）。

興味深いことに、アッシリアの首都ニネベで、ラキシユだけが目立つように描かれており、エルサレムは王宮の壁に見当たりません。センナケリブはラキシユに勝利したことしか自慢できませんでした。天の神とアッシリアの神々との勝負の決着は、神の民の救出という形ではっきり示されました。神はアッシリアによる侵略行為をご覧になり、ヒゼキヤの祈りの言葉をお聞きになったのです。神は歴史の中で行動しておられます。

あの時、あの場所でイスラエルを奇跡的に救出された神と、あなたが今日、祈りをささげ、信頼している神が同じ神であることを、どうしたらいつも覚えることができますか。

2007年7月、大英博物館の発掘事業に従事していたウィーン大学の学者が、バビロンの王ネブカドネツアルの時代の石板を見つけました。そこに、エレミヤ39:3で言及されている「サル・セキム」というバビロンの役人の名前を発見したのです。サル・セキムは、ダニエルやネブカドネツアルの時代から（考古学のおかげで）再発見された多くの人たち（王や役人など）の中の1人です。

問3 ダニエル1章、5章を読んでください。神は歴史上の多くの人に影響を与えるために、ダニエルを御自分の僕、預言者として用いられましたが、神のその行為とダニエルの初期の決意とは、どのようにつながっていますか。

ダニエルは、食べる物に関しても、祈ることにしても、神に忠実であり続けようと「決心し」（ダニ1:8）しました。このような良い習慣は、彼の初期の経験の中で形成され、長い人生の間、彼に力を与える習慣になったのです。その結果、明晰な思考力、知恵、理解力が天から与えられました。ネブカドネツアルやベルシャツアルはそれを認め、ダニエルを王国の最も高い地位に昇格させました。しかし、おそらくもっと重要なのは、結果的にネブカドネツアル自身が回心したことでした（ダニ4:31～34〔口語訳34～37〕）。

ネブカドネツアルはナボポラッサルの息子でした。彼らはともに輝かしい都市、古代世界において並ぶもののない都市を築きました（ダニ4:27〔口語訳4:30〕）。バビロンという都市は巨大で、そこには300以上の神殿と見事な宮殿があり、巨大な二重の城壁（内壁の厚さは約6.6メートル、外壁の厚さは約3.6メートル）で囲まれていました。これらの城壁には、八つの主要な城門が作られ、城門にはすべて、バビロンの主要な王朝にちなんだ名前が付けられていました。最も有名なのはイシュタル門で、ドイツ人によって発掘され、ベルリンのベルガモン博物館に復元されています。

ダニエル7:4で、バビロンは鷲の翼を持つ獅子として描かれています。イシュタル門に続く道には、120の獅子の像がずらりと並んでいました。人間に襲いかかっている強大な獅子の像も発掘の中で見つかり、今日でもこの町の外に立っています。これらはみな、獅子が偉大なバビロンにふさわしい象徴であったことを証明しており、聖書の歴史とその預言のメッセージを裏づけています。

ダニエル1:8は、ダニエルが「決心し（た）」と記しています。それはどういう意味ですか。あなたには、何かしよう（あるいは、何かしまい）と「決心し」なければならないことがありますか。

問4 マタイ 26：57～68、ヨハネ 11：45～53、18：29～31 を読んでください。カイアフアとはだれですか。キリストの死において、彼はどんな役割を果たしましたか。ポンティオ・ピラトとはだれですか。最高法院が目的を果たすために、ピラトの決定はいかに重要なものでしたか。

カイアフアは大祭司で、イエスを殺そうとする陰謀を推進しました。彼が存在したことは、ローマ人のために書いたユダヤ人歴史家ヨセフスも記録しています。「彼〔シリア総督ウィテリスス〕はそのことに加えて、カイアフアとも呼ばれたヨセフから大祭司職を奪い、前の大祭司であったアンナスの息子ヨナタンを後継者に任命した」(『ヨセフス全集』第18巻4章381ページ、英文)。

1990年、ある一族の墓がエルサレムの南で発見され、そこには12の納骨棺が収められていました。その墓から出た硬貨や陶器によって、墓は西暦1世紀中頃のものだと推定されました。装飾が最も凝っている納骨棺には何組かの骨が入っており、「カイアフアの息子ヨセフ」という名前が記されていました〔大祭司カイアフアの正式な名前。「カイアフア」というのは、実は彼の父親の名前〕。多くの学者は、これがイエスの死に直接関わった大祭司カイアフアの墓と納骨箱であると信じています。

1961年、カエサリア・マリティマの劇場の石に、皇帝ティベリウスの下でユダヤの総督であったポンティオ・ピラトの名前を含む碑文が見つかりました。

このように、いずれの場合も、キリストの死を取り巻く主要人物の何人かが歴史によって裏づけられているのです。

西暦1、2世紀の世俗の歴史家たちも、ナザレのイエスについて語っています。ローマ人の歴史家タキトゥスは、キリストと、皇帝ティベリウスの治世下にポンティオ・ピラトが彼を処刑したこと、またローマの初期のクリスチャンについて書いています。ローマ総督の1人小プリニウスは、西暦112年から113年にかけて、クリスチャンをどう扱うべきか、トラヤヌス帝に質問する手紙を送っています。彼は、クリスチャンがある決まった日の夜明け前に集まり、神についての賛美歌を歌っていると述べています。

これらの考古学的発見や歴史的資料は、(死後50年以内に礼拝されていた)イエスの存在を示す聖書以外の追加の枠組みを与えてくれます。しかし、イエスに関する一次資料は福音書そのものであり、私たちはイエスと彼の生涯についてもっと知るために、それらを注意深く研究しなければなりません。

私たちは孤立して生きているわけではありません。私たちの選択は、自分自身だけでなく、ほかの人にも影響します。同様に、大昔の神の民の生き方も、彼ら自身だけでなく、ほかの人の未来に大きな影響を及ぼしました。「信仰」の章として有名なヘブライ 11 章には、そのような大昔の信仰の英雄たちの影響に関する要約が見られます。

問 5 ヘブライ 11:1~40 を読んでください。私たちはこれらの大昔の英雄たちから、また彼らの生涯を研究することによって、どんな教訓を学ぶことができますか。エノク、ノア、アブラハム、サラ、ヨセフ、モーセ、ラハブ、サムソン。

信仰とは、何かやだれかを単に信じることではありません。信仰とは、信じることに従って行動することです。それが働く信仰です。これが義とみなされるものです。歴史を変えるのは、このような信仰の行動です。こういった行動はいずれも、神の言葉を抛り所にしています。

ノアは箱舟を造ったとき、経験や理屈よりも神の言葉を信頼し、信仰によって行動しました。雨はそれまで降ったことがなかったので、経験や理屈は、洪水などまったく意味不明だと告げていました。しかし、ノアは神に従い、人類は生き残りました。その頃アブラムと呼ばれていたアブラハムは、南部メソポタミアのウル（当時、世界で最も洗練されていた町）を去り、神がどこへ導かれるのかも知らずに出かけました。彼は、神の言葉に従って行動することを選んだのです。モーセは、当時の最大の帝国エジプトを治める王になることよりも、神の民を約束の地へ導く羊飼いになることを選びました。彼は、燃える柴から呼びかける全能者の声を信じました。ラハブは神の救出の報告を信じようと決心し、2人の斥候をかくまい、イエスの家系の一員になりました。私たちの決心が現在の世代や未来の世代の無数の人生にどれほど影響を及ぼすか、私たちはなんとわかっていないことでしょう！

あなたには、近々決心しなければならない何か重要なことがありますか。あなたはどのように選択しますか。なぜそうするのですか。

参考資料として、『人類のあけぼの』第63章「ダビデとゴリアテ」、『国と指導者』第28章「熱心な改革者ヒゼキヤ王」、第30章「大国アッシリアからの解放」を読んでください。

「聖書は、人類のもっている最も古いそして最も広範な歴史である。それは永遠の真理の泉から出た新鮮な流れで、各時代を通じて神のみ手によってその清純さが保たれたのである。それは、人間がどんなに研究しても見通すことのできない遠い過去を照らしている。地の基礎をすえ、天をのべた能力は、ただ神のみ言葉の中にしか見られない。諸国民の起源について信頼すべき記録は、ただ聖書の中のみ見いだされる。人間の自負心や偏見に汚されない人類歴史の記録は聖書の中にだけある」(『教育』147ページ)。

「神と神の言葉について知っている人は、聖書の神聖さについて確固とした信仰を持っている。彼は科学に関する人間の考えによって聖書を調べない。彼は誤りのない基準によってこういう人間の考えを調べるのである。彼は、神の言葉が真理であり、真理はそれ自身に矛盾がないことを知っている。いわゆる科学の教えの中で神の啓示の真理と矛盾するものは何であれ、単なる人間の推測にすぎない。

本当に賢い人には、科学的研究が思想と情報の広大な領域を開くのである」(『教会への証』第8巻325ページ、英文)。

話し合いのための質問

- ① 確かに、聖書の歴史を裏づける考古学的証拠を見いだすことは、良いことです。しかし、聖書の物語と矛盾する形で解釈される考古学的証拠が見つかったときは、どうなるでしょうか。私たちはこのことから、考古学や人間のほかの科学の主張にかかわらず、神の言葉を神の言葉としてより頼み、信じなければならないという事実について、何を学ぶべきですか。
- ② (現代という有利な時点から見て、成就したとわかる) 過去に成就した聖書のあらゆる預言に思いを馳せてください。例えば、ダニエル2章と7章のほとんどの王国を思い浮かべてください。私たちは、歴史の中で成就したこれらの預言から、まだ成就していない将来の預言に関して主を信頼することを、どうしたら学ぶことができますか。